

5.1.6 海外研修・海外交流

① イギリス研修 UCL Japan-Youth Challenge 2019.07.19- 07.28 実施

- ・本校からの参加者は 5年生2名(女子2名)・4年生1名(女子1名)および引率教諭1名。
- ・今年度は「Accessibility for All: Sports, AI and Robotics」をテーマとしたワークショップやシンポジウムが実施された。このテーマは本校のSGH課題研究の3つのテーマ『教育・リスク・葛藤と軋轢』と緩やかに関連していたため、生徒へ課題研究の深化に役立った。参加生徒たちはイギリスの最先端の研究者の講義を聞き、自らの研究テーマの理解を深められた。
- ・他校の日本人生徒、そしてイギリスの生徒と一緒に行動することで、考え方や、教育制度、そして生活スタイルの違いなどに気付き、課題研究の深化に貢献した。
- ・将来海外大学に進学したいという考えが現実味を帯びた選択肢となっていった。
- ・教員向けのイギリスの教育に関する講義は本校のSGH教育プログラムを相対化して考える良い機会となった。
- ・5年間継続的に参加したことによって「組織力・対話力」ともに向上した。講義内容の豊富さと高度さ、多様な同年代の参加者との生活やディスカッション、自らの研究テーマの深化、進路の選択等が役立ったためである。また、大テーマに関連したシンポジウムやワークショップに毎年参加したため、その深化による成果もあった。課題は、主体的に関わるための質問力を含めた「対話力」のさらなる向上とSGH指定終了後の継続方法、他の生徒への還元である。

(1) 目的

今後世界を担う日英の高校生が国際社会のリーダーとなる資質を養うことを目的として開催されるプログラムを活用し、UCLが大学として取り組む社会課題についての知識を深め、文化・背景の異なる他者との対話を通して、自己の課題研究の充実を図る機会とする。今年度は「みんなのためのアクセシビリティ：スポーツ、AI、ロボティクス」と題された大規模な公的シンポジウムが催される。このシンポジウムに参加して海外の研究者による研究発表を聴き、自らもその発表に関わることで、国際的な課題意識の共有の機会を得る。

(2) 実施内容

関連仮説番号 I・II

実施日時：2019(令和元)年7月19日～7月28日

実施場所：イギリス ロンドン及びケンブリッジ

United college London・University of Cambridge・Rikkyo School in England

主催：United College London

参加生徒：本校生徒5年2名4年1名(女3名)。

概要：

研修の主軸はUCLにての教授陣によるレクチャーとワークショップ・ディスカッションおよび公式シンポジウムへの参加と発表であった。また、ケンブリッジにおいては、ケンブリッジ市内でのフィールドワーク・ケンブリッジの教授陣による講義受講や図書館訪問を行った。

UCLにおけるグランドチャレンジの大きなテーマ(大学として設定している研究)は・Global Health ・Sustainable Cities ・Intercultural Interaction ・Human Wellbeingの4つであるが、今回は特にシンポジウム関連でソーシャルインクルージョンについて事前にレポートが課された。本校からの参加者にとっても、起業と上記4つの大テーマは個人としての課題研究テーマにも関連させることのできる視点であったと考えられる。UCL Grand challenge 主催者側から課された事前のレポート(エッセイ)の指示は以下の通り。

* After reading “The Promotion Of Social Inclusion” published by Charity Commission, UK, (https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/359358/socinc.pdf) please write what you know about it, what you think about it, and your opinion. Please choose people specifically and explain why you think they’re socially excluded most?

* How can we ensure that our society is fully accessible by everyone(=social inclusion)? Explain current problems and propose possible solutions to improve the situation.

日程表

UCL-Japan Youth Challenge 2019 スケジュール

日	日付	時間	会場	内容	
1	7月19日(金)		立教英国学院 Guildford Road, Rudgwick, West Sussex RH12 3BE	到着、オリエンテーション、夕食、就寝	
2	7月20日(土)	午前中	立教英国学院 Guildford Road, Rudgwick, West Sussex RH12 3BE	日本人向け プログラムの概要説明、大沼教授によるイントロダクション、各学校紹介(英語) アイスブレイキングセッション、自己紹介、スポーツ、BBQ	
		夜			就寝
3	7月21日(日)	午前中	立教英国学院 Guildford Road, Rudgwick, West Sussex RH12 3BE	ケンブリッジに向け貸切バスで出発 ケンブリッジに到着後、宿泊先に荷物を預け朝食(自己負担) ケンブリッジ市内観光(バンテング/観光船) 宿泊先にチェックイン	
		昼			Travelodge Cambridge Newmarket Road 180-190 Newmarket Road, Cambridge, Cambridgeshire, CB5 8HF
		午後			The Old Hall, Queens' College, University of Cambridge
		夕方			Travelodge Cambridge Newmarket Road
4	7月22日(月)	夜	University of Cambridge	ケンブリッジ大学教員による講義、ケンブリッジ大学図書館・施設見学	
		8:30 - 12:00	Cambridge City Centre	カレッジの学生食堂にて朝食(自己負担)	
		昼	University of Cambridge	ケンブリッジ大学教員による講義	
		14:00-17:00	Dining Hall, Hughes Hall, University of Cambridge	夕食(ケンブリッジ大学 Hughes Hall)	
5	7月23日(火)	夕方	Travelodge Cambridge Newmarket Road	就寝	
		夜	Travelodge Cambridge Newmarket Road	ロンドン大学インターナショナルホールに向けて貸切バスで出発	
		9:30	UCL Bedford Way, London WC1H 0AL	朝食 Mr Oliver Calmonsonによる講義・ワークショップ 堀岡潤一監督の映画鑑賞・ディスカッション	
		11:30 - 12:30	UoL International Hall, Lansdowne Terrace, London WC1N 1AS	夕食 生徒による討論、就寝	
6	7月24日(水)	13:30 - 15:30	UCL Gower Street, London WC1E 6BT	UCL 大学見学とUCL教員による講義(11:00 - 12:00)	
		15:30 - 17:00	UCL Jeffery Hall, 20 Bedford Way, London WC1H 0AL	朝食	
		18:30 - 19:30	UoL International Hall, Lansdowne Terrace, London WC1N 1AS	UCL Grand Challenges ワークショップ (詳細: www.ucl-japan-youth-challenge.com)	
		夜	UoL International Hall, Lansdowne Terrace, London WC1N 1AS	夕食、就寝	
7	7月25日(木)	9:00 - 10:45	UCL Bedford Way, London WC1H 0AL	生徒 大学進学説明会、英語レッスン 教員 講義:日本の教育現場におけるオリンピック・パラリンピックの教育実践事例等	
		11:00 - 12:00	UCL Roberts Building, London WC1E 7JE	UCL教員による講義	
		12:00 - 13:00	UCL East, London E15 2JE	UCL Eastに移動	
		13:00 - 14:00		朝食	
8	7月26日(金)	14:00 - 17:30	UoL International Hall, Lansdowne Terrace, London WC1N 1AS	UCL East見学	
		17:30 - 18:00		International Hallに移動	
		夜		夕食、英国大学生による英国の大学に進学するための座談会、就寝	
		9:00 - 10:45		UCL Bedford Way, London WC1H 0AL	生徒 英語レッスン 教員 講義:継続教育におけるAIの活用
9	7月27日(土)	11:00 - 12:00	UCL Roberts Building, London WC1E 7JE	プレゼンテーション練習	
		12:00 - 13:00	Institute of Advanced Studies (UCL)	朝食	
		13:00 - 17:00	UCL Christopher Ingold Building, London WC1H 0AJ	シンポジウム「みんなのためのアクセシビリティ:スポーツ、AI、ロボット工学」	
		18:00 - 20:00	UCL Gower Street, London WC1E 6BT	UCL Grand Challenges レセプション	
10	7月28日(日)	夜	UoL International Hall, Lansdowne Terrace, London WC1N 1AS	夕食、生徒による討論、就寝	
		9:00 - 12:00	UCL Gower Street, London WC1E 6BT	大英博物館(徒歩移動)	
		13:30 - 15:30	London City Centre	ロンドン観光(ボランティア同伴)、朝食(自己負担)	
		16:00 - 18:30	UCL Gustave Tuck Lecture Theatre, London WC1E 6BT	UCLに集合 修了式 打ち上げパーティー	
18:30 - 20:00	UCL Chadwick Building, London WC1E 6BT	9:00に Interantional Hallチェックアウト後、ウインザー城もしくはロンドン・ヒースロー空港に向けて出発			

研修経過 :

Day1 20190719

主として移動

11:20 発 JAL042 便 羽田-17:50 ロンドンヒースロー着

21:00 W.Sussex州 Horsham 市 Rikkyo School in England 到着。

※翌日の時間等確認の上、就寝。

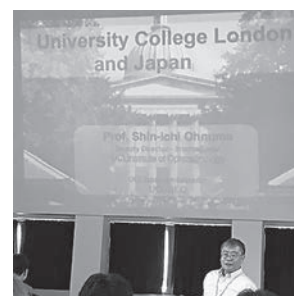
Day2 20190720

Rikkyo School in England にて研修

AM Orientation / School Introduction

約 15 校が自校の紹介プレゼンテーションを行った。

PM Sports Ice-breaking BBQ



3つのグループに分かれテニス、ドッジボール、サッカーを楽しんだ。指示の声かけやプレー中のコミュニケーション・コンタクトなど、スポーツを通じて行うことでかなりの生徒がこの時を境に「互いに距離を縮められた」と感じていたようであった。英語のレッスンも受け、地球温暖化についてチームで議論した。

Day3 20190721

AM ケンブリッジへ移動

PM ケンブリッジ市内にて班別フィールドワーク

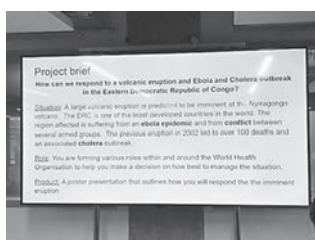
生徒はグループごとにケンブリッジ市内でフィールドワークを行った。大学を中心とした学園都市の成り立ちと地理的状況・歴史について、その実際を観察しながら学習した。



Day4 20190722

AM ケンブリッジ観光 Chapel of King's College

パンティング（舟遊び）を体験



PM 13:30～レクチャー—

Prof. Simon Kaner

仏像 日本文学 陶器 算術書について学んだ。

Dr. Caroline Trotter “グローバルヘルス”

薬品（ワクチン）製造国で単価が異なることや、集団免疫の有効性についてなど学校で学んだ知識との関連性があり魅力的な講義だった。

Dr. Mark Ainslie “Superconductivity”

この講義では物理学が我々の生活にどう関わり技術革新に貢献しているか実例を挙げ、生徒に分かりやすく説明がなされた。超電導の利用については未来の運輸機関（空飛ぶ車など）の実現はそう遠くないと感じさせるものだった。

Dr. Masasi Narita

偏見のない分析の重要性やウィリアムテルを例にした抑圧とストレスについて教授自身の体験を共有できる講義だった。

Day5 20190723

AM ロンドンへ移動

PM UCLにて講義・ワークショップ

14:30-16:30 Lecture & Workshop by Mr. Oliver Calmonson, the UCL Academy コンゴにおけるコレラとマラリアの軽減について議論した。ケーススタディとして疫病拡散をいかにして防ぎ、具体的に何が必要か、医者やNGOの立場になって優先順位を考えるなど、フォーマットに則った分かり易くかつ有意義なワークショップになった。



17:00-18:40 梶岡潤一氏による映画“インパール1944”鑑賞後 梶岡氏と議論 梶岡氏によると史実や歴史上の人物について、驚いたり畏怖を抱いたりした事を我々と共有し紛争解決の一翼を担うためこれまで映画を製作してきた。生徒は「戦争を防ぎたい、紛争を解決したい。」という梶岡氏の志に多くのインスピレーションを受けた。

<https://cbpfilms.uk/imphal-1944/>

研修時に配布された梶岡氏の紹介文は以下の通り

Junichi Kajioka is an award-winning Japanese writer, director and actor based in London. Junichi has a passion for discovering and telling little known stories to the world, especially those connected with relations

between Japan and UK. Junichi has established CULTURE BRIDGE PRODUCTIONS in order to help build bonds and wider global cultural connections through his filmmaking. As an actor he won the Best Supporting Actor award for the British feature film TAKING STOCK in LA and Monaco.

His other notable works include 47 RONIN, SPECTRE and JOHNNY ENGLISH STRIKES AGAIN.

Day6 20190724

AM 8:45-9:20 Move to UCL

9:30-11:00 UCL Tour To learn about Mr. Jeremy Bentham, the spiritual founder of UCL To go to the library

11:00-11:50 Lecture by Dr. Jenny Brooks, the London Centre for Nanotechnology, UCL

従来の力学と量子力学の違いや量子力学が遺伝子研究に及ぼす影響、人間の嗅覚に焦点をあてたナノテクノロジーの可能性について学んだ。

PM 13:00-17:00 Grand Challenges Workshop “ Accessibility for All ”

100名の参加者を10のグループに分け、全ての人々にとってのアクセシビリティと、その障壁をどうやってなくすか議論した。それぞれのグループが、“Stereotype” “Lack of Education”といったキーワードを基に、社会に存在するバリアの認識と問題解決の端緒を見出す貴重な時間となった。



Day7 20190725

AM 9:00-9:30 Japanese students: Introduction of Foundation Courses

Teachers: Introduction of Study Abroad

9:30-10:45 Japanese students: English lesson Teachers: lecture

11:00-12:00 Lecture by Dr. Matsuzaki “Design Policies for Removing the Barriers.”

PM 14:00-18:30 Visit UCL East Introduction of UCL East

Lecture by Dr. Vijay Pawar, UCL “3D Machine Vision and AI” 乗用車の自動運転、建設業界のビル設計、火星探査機等々、AIによって飛躍的進歩を遂げている産業界の実例を知る機会となった。

Lecture by Mr. Takahiro Tsunoda, DPhil candidate at University of Oxford

“AI, Quantum Computers, and Future of Science” Visit UCL Robotics Walking in Park

Day8 20190726

AM: 9:30-10:45 Japanese students: English lesson

Teachers: lecture by Prof. Paul Grainger

11:00-11:50 Students: Presentation Practice

Teachers: Introduction of UCL education system by the UCL Center for Language & International Education (CLIE)

PM: 13:00-17:00 Symposium “Accessibility for All: Sports AI and Robotics”

・ Mr. Kazuki Takahashi (Director of Public Relations Division, Fukushima Prefecture)

避難民の帰還と福島県の人口減少

・ Catherine Holloway (Academic Director of UCL Global Disability Innovation Hub

障がい者（ユーザー）目線での技術革新と社会モデルについて

・ Takayuki Suzuki (Multiple Paralympic Medalist/ Para swimmer

東京オリンピックを成功させるには？日英におけるオリンピックとパラリンピアンとの境遇の違い

- ・ Naomi Hirose (Vice Chairman of Tokyo Electric Power Company)

“Steps For Revitalization in Fukushima” 除染作業の経過、農産物の販売回復の様子、原発内で放射性物質除去に活躍中のロボットの紹介

- ・ Noel Thatcher MBE (5 time Paralympic gold medalist, para-athlete)
- ・ Noriko Cable: (Research fellow at UCL Institute of Epidemiology & Health)

18:00-20:00 Grand Challenges Reception

各グループがアクセシビリティについてグループの考えを発表した。限られた時間ではあったが、研修を通して親しくなった仲間と社会の障壁について考え、大勢に向けて解決策やさまざまな問題への喚起を促した結果、大きな達成感がもたらされたと言える。

- ・ 福島の高校生によるレセプション UCL 研修に参加した福島県出身の高校生が短いスピーチを行い、社会の回復状況とこれからの展望を知らしめた

※UCL Japan Young Challenge では日本人と英国人の生徒の混合グループで共同発表をおこなった。すべての人が社会参加をすることはどういうことかをそれぞれグループが選んだテーマに沿って、国籍の壁を越えて意識共有ができたことは大きな成果だった。また本校生徒はシンポジウムの進行役を務め、講義では積極的に質問をしていた。生徒たちには今後積極性をさらに磨きながら国際会議で通用するようなスキルを身に付けていてもらいたい。

Day9 20190727 Fieldwork in London ・ Group presentation

AM 8:30-15:00 ロンドン市内でのグループ別フィールドワーク
大英博物館 テムズ河 キングスクロス

PM 16:00-18:30 Final Ceremony 18:00-20:00 Final Party

Day10 20190728 19:15 発 JAL044 便 ヒースロー

Day 11 20190729 15:00 羽田着



(3) 成果と課題

参加した生徒の感想：

・このプログラムは一生の宝になる友情を培い、新しい学問や分野に視野を広める機会を与えてくれました。同時に大勢の知らない人の前で話す機会も与えてくれました。この 10 日間、新しい学問分野をさらに深く知るために新しい質問や課題が湧き上がってくるのを感じました。もちろん学校の先生方に励まされたからもありますが、多くの場合無意識にそうするようになっていました。またディスカッションの進行を務めることが何回もあり、どのようにしたらスムーズにディスカッションを進めることができるのか、そしてどのようにしたらより多くの人のアイデアを引き出せるか、というディスカッションの進行の仕方を学ぶことができました。最終的にシンポジウムの進行役も務めることになり、この UCL 研修を通して様々なスキルを習得することができたと感じています。

・短編映画『インパール 1944』のメッセージに感動しました。監督は国際紛争を終わらせる道筋を探るために映画を撮っているとおっしゃっていました。そして世界中で起こっている紛争解決に向けて、私たちはそれぞれが自分たちなりの方法で働きかけられるのではないかとおっしゃっていました。監督が映画の製作を通じて国際平和を訴えていたように、国際社会を取り巻く諸問題について私たち自身が考え、行動することは問題解決のために重要なことだと感じました。

コレラとマラリア患者をいかに減少させるかを話し合ったディスカッションが印象に残っています。最初はグループで自分の意見を述べることにためらっていたのですが、このディスカッションから自分の意見を述べられるようになったからです。

課題研究との関わり・影響・効果：

本校 SGH の課題研究との関わり、影響については次の 3 点が指摘できる。

- ① UCL Grand Challenge のテーマは、“Accessibility for All: Sport, AI and Robotics “であった。このテーマは本校の SGH 課題研究の 3 つのテーマ『教育・リスク・葛藤と軋轢』と緩やかに関連していたため、生徒へ課題研究の深化に役立った。参加生徒たちはイギリスの最先端の研究者の講義を聞き、自らの研究テーマへの理解を深めていったようである。例えばリスク、葛藤と軋轢に関する政策決定に関しての理解を深めるディスカッション活動が多数開催された。例えばある発展途上国において同時多発的に災害や伝染病が発生したという仮想の設定の中でどのような政策決定を行ったらいいのか、ディスカッションを行った。その中でリスクの大きさを測り、葛藤と軋轢の中で政策決定を行う厳しさを学んでいた。
- ② また他校の日本人生徒、そしてイギリスの生徒と一緒に行動することで、考え方や、教育制度、そして生活スタイルの違いなどに気づいていったようである。例えば本校からの参加者の研究関心は「若者の自尊心について」であり、この生徒にとっては同世代のイギリスの生徒と触れ合うことは研究テーマの理解に大きく貢献したはずである。
- ③ 更に参加生徒の何人かにとっては、当研修は将来設計の場になったようである。参加生徒の中にはこの研修に参加することで、将来イギリスの大学進学を真剣に検討するようになったようである。参加生徒たちにとっては在英日本人の研究者や学生の話聞くことで留学が現実味を帯びた選択肢となっていったようである。
- ④ 引率教員にとっても教育について考えさせられる機会が多い研修だった。教員向けのイギリスの教育に関する講義は本校の SGH 教育プログラムを相対化して考える良い機会となった。

5年間このプログラムに参加した成果と課題：

5年間の振り返りの中で、共通する成果と課題は以下の通りである。

◆成果

- ・豊富なテーマについてディスカッションが英語でできた。
- ・日本も含めた様々なバックグラウンドを持つ年代の生徒と生活しながら課題にチャレンジすることで得るものが大きかった。
- ・大学での講義において学ぶことが多く、進路を考える上で大学そのものの講義の面白さや、海外（イギリス）で学ぶことについての現実味を感じる生徒が多かった。
- ・課題研究に活かせるように積極的に質問ができた。
- ・研究テーマが他国／他地域において、どのように受け取られ、どのように研究されているのかということを実地に知ることができた
- ・教員向けのワークショップで最先端の話題について講義を受け、他校の先生方と学べたことは大変有意義であった。
- ・年度を追って講義は高度なものになっているため、学ぶことが多かった。

◆課題

- ・高レベルな話題についての講義では質問をなかなか言えない場面もあった。主体的に関わっていくには、事前学習で分野について学び、単語力もあげた上で質問を意識して講義を聞けたらよかった。「対話力」を意識的に向上させる必要がある。
- ・単に進路やキャリア選択のための見学体験ツアーにしないために、一人一人が自分なりのインセンティブをどのように持って参加したら良いのか。
- ・SGH 指定終了後に継続的に研修を実施していくための予算立てをどのようにしたら良いのか。
- ・参加生徒が限られてしまうので、いかに他の生徒にそこで学んだことを還元できるか。

② フィリピン研修

- ・参加者は 4年生5名(男子2名,女子3名)・5年生4名(女子4名)および引率教諭3名。
- ・主な研修内容は、アジア開発銀行にてスタディーツアーに参加、Colegio de Santa Monica de Angat(現地校)にてプレゼンテーション(日本文化・研究)やディスカッション、認定NPO法人アイ・キャンの事業地訪問(パヤタス・マニラ市内)。
- ・研修を経て、生徒たちは現地で発生している様々な問題の影の部分に触れ、それらも含めてフィリピンを取り巻く諸問題が今後どのように変化していくであろうか、そして、高校生の自分たちに何ができるのかと思いをはせる様子が窺えた。
- ・フィリピン研修を通して得た気づきや衝撃は、後の自分に影響があるとは思っていると考える反面、日本に帰ってきたら、あまりにも簡単に元の日本人高校生に戻ってしまったと感じている生徒もいた。
- ・5年間継続することで、大テーマ「教育」と「リスク」を現地で体感して考え、課題研究の深化に貢献できるプログラムとなった。
- ・フィリピン自体の教育制度の変化により、交流校との研究のフィードバックがやりやすくなり、お互いに刺激を与えられる良い関係を築けた。
- ・「フィリピン経験者交流会」では本研修を経験した卒業生が、フィリピン研修での体験や学びが、大学での研究や取り組んでいる活動に活かしていることがわかった。また、現役の研修参加生徒に過去の学びを還元することが出来た。
- ・フィリピン研修に参加した生徒は、固定観念や偏見が自分たちの中にならかなりあることに気づき、それらのいくつかを払拭、あるいは捉え直し、視点を新たにしようとする傾向が見られた。
- ・日本の学校生活での「学び」や問題の捉え方に対して、視点を新たにした生徒も多い。
- ・フィリピンと日本の差異を捉えることで、自国である日本、そこに住む日本人について考えを深めながら潜在する様々な問題に目を向けていくことは、国際的な課題研究の入り口に立っていると言えるのではないか。

(1) 目的

『SGH 海外研修フィリピンFW』は、「ISS チャレンジ」のSGH部門に応募し、課題研究に取り組んでいる生徒を対象として、生徒の課題研究の深化や検証のための調査を現地で行うとともに、現地の中等教育学校を訪問することを通して、フィリピンの現地の人々の生活や考え方を实际的に捉え、また相互の研究交流の機会を得ることで国際的に通用する課題研究の発展を促す機会とする。

(2) 実施概要

- ・主催 本校 SGH 委員会
- ・期間 2020年1月19日(日)～1月23日(木)4泊5日
- ・場所 フィリピン共和国 ルソン島内
- ・主たる訪問先
Asian Development Bank フィリピン国立博物館
Colegio de Santa Monica de Angat(現地校)
認定NPO法人アイ・キャン マニラ市内、パヤタス地区各事業地
- ・主な研修内容
 - ① アジア開発銀行 スタディーツアーに参加
 - ② Colegio de Santa Monica de Angat(現地校):プレゼンテーション(日本文化・研究)やディスカッション。
 - ③ 認定NPO法人アイ・キャン:事業地訪問(パヤタス・マニラ市内)



・旅程

月日 (曜)	訪問先等 (発着)	研修内容	移動手段
1月19日 (日)	7:30 羽田空港国際線ターミナル集合 9:35 発 全日空 NH869 13:35 着 マニラ：ニノイ・アキノ国際空港 *スモーキーマウンテン跡等見学など 夕食：市内・外食	移動 市内見学	借り上げ 車両
1月20日 (月)	出発：朝 9:00 ~ICAN 事業地パヤタス訪問 昼食：外食 午後 マニラ市内事業地見学 夕食：市内レストラン	現地視察・交流 講話・質疑応答	借り上げ 車両
1月21日 (火)	出発：朝 終日 Colegio de Santa Monica de Angat *現地校交流 昼食：現地校にて 夕食：市内	発表・質疑応答	借り上げ 車両
1月22日 (水)	出発：朝 ADB スタディーツアー 昼食：ADB にて 午後：国立博物館 夕食：ホテル ビュッフェ	講話・現地視察・質疑 応答	借り上げ 車両
1月23日 (木)	出発：朝 サンチアゴ要塞 ホセリサル記念館見学 14:50 発 マニラ：ニノイ・アキノ国際空港 全日空 NH870 20:00 着 羽田空港国際線ターミナル	市内見学 移動	移動は借 り上げ車 両

・参加生徒 4年生5名(男子2名, 女子3名)・5年生4名(女子4名) 計9名

・引率 本校教員3名

・事前指導、及び事後指導

研修実施にあたっては、課題研究の深化と英語力の強化をねらいとして事前事後研修を計 22 回にわたって行った。各回の主たる内容は下表の通りである。

回数	月日	曜	時間	内容	備考
1	9月17日	月	12:30-13:00	参加者顔合わせ、スケジュール確認	図書課題① 急成長する大国-フィリピン
2	9月27日	金	16:00-17:00	8回生菊田講話、インタビュー	
3	10月4日	金	16:00-17:30	8回生園田講話、インタビュー	図書課題① 〆切
4	10月10日	木	16:15-17:15	昨年度の研修の様子 スライド紹介 現地校交流(ディスカッションテーマ検討)	現地校交流(ディスカッションテーマ検討)
5	10月18日	金	16:00-17:00	現地校交流準備	
6	10月24日	木	16:15-17:15	現地校交流準備	
7	10月29日	火	16:15-17:15	ディスカッションテーマ分担、出し物検討 JICAマニラオフィス、もしくはADB訪問の検討	課題研究の内容の英文化 ICAN資料、PNLSC資料配付
7a	11月14日	木	放課後	4年生のみ 課題研究 英語発表(英文原稿・スクリプトなど 要提出)	
7b	11月15日	金	放課後		
8	11月19日	火	16:00-17:00	アガウィリ先生 フィリピンの地理・歴史講話	
9	11月21日	木	16:00-17:00	アガウィリ先生 CSMAディスカッションテーマWS	
9a	11月25日			5年生のみ 課題研究 英語発表(英文原稿・スクリプトなど 要提出)	3学期へ
10	11月26日	火	16:15-17:15	ディスカッション練習(日本語、英語練習)	
11	11月29日	金	15:45-17:45	NPO法人アイキャン東京事務所 講話	
12	12月16日	月		現地校交流準備	
	12月17日	火		同上	
	12月18日	水		同上	
13	12月21日	土		フィリピンFW経験者交流会	OG 5回生, 6回生
14	12月24日	火		ディスカッション練習、FW保護者会	「あなたの日本について」、英語でA4一枚 ↓
15	1月8日	水		4年担当箇所のプレゼン、挨拶等確認リハ	Academic Dayにつき、場合によってはお昼休み
16	1月9日	木	16:15-17:45	ディスカッション最終調整 渡航前確認 ハンドブック配布	→5年生編入生(マニラ滞在経験あり) 講話アボ済
17	1月10日	金	15:45-17:45	お土産購入@大泉学園DAISO 購入後、学校にてセット作り	
18	1月15日	水	15:45-17:45	5年生担当箇所のプレゼン、挨拶等確認	
19	1月30日	木	16:15-17:45	事後学習 リフレクション	
20	2月7日	金	15:45-17:45	Global Café準備、リハーサル	
21	2月10日	月	16:15-17:15	Global Café にて事後報告会	
22	2月22日	土		ISSチャレンジ 最終審査会午後、研修についてスピーチ	



(3) 成果と課題

研修報告1 <生徒のジャーナルより>

生徒は昨年度と同様に研修中全期間にわたってジャーナルを書いた。教員が学校で加入している Microsoft のクラウドサービス Office365 にてフィールドワークのグループを作成し、各自のジャーナルはそのクラウド「One Drive」に保存した。今年度は参加者全員が毎日英文で記録を残した。

研修報告2 <生徒報告レポート>

フィリピン研修全体をふまえて研修報告書を作成させるにあたり、以下の3点をふまえた。

1. 事前研修から得られたこと、フィリピンへの思い
 - フィリピンを訪問する前までの研修で、フィリピンのどのようなことについて考えたか
 - フィリピンのどんな点に疑問を抱いたか
2. フィリピン訪問中、および訪問後に考えたこと。新たな発見や、考えが改まったことについて。
 - フィリピンを訪問して自分の抱いていた疑問や考えが、何に、どのような影響を受けて変化したか。
 - 変化しなかったとしたら、改めて実感したことは何か。
3. 課題研究とのつながり
 - 研修全体を通して、自身の課題研究とどのようなつながりがあったか。
 - 来年度以降の課題研究活動にどう活かせるか

2019年度フィリピン研修の成果

本校 SGH 事業の最終年度である5年目を迎え、海外研修フィリピンフィールドワーク（以下、フィリピン研修）も最終年度にふさわしいものとなることを目指した。初年度の研修から5年という歳月を経て、フィリピンと日本がどのように発展し、変化・変容してきたかをふまえながら、マニラ市やパヤタス地区の訪問を中心とするフィールドワークから何を学び、得るのか、選抜された9名の生徒と共に研修へ臨んだ。

フィリピン研修は初年度から、本校 SGH の大テーマである「教育」と「リスク」に焦点を当ててプログラムを組んでいる。今年度のフィリピン研修において充実させたことは、様々な立場の人からフィリピンについて情報提供をいただくと同時に、研修参加生徒が抱いた疑問に答えていただく機会を複数回設けたことである。具体的には、過去のフィリピン研修を経験したことのある卒業生と交流したり、実際にフィリピンで支援事業に携わったことのある NPO 法人職員に登壇いただいたりした。そうすることで、事前研修を含む研修全体に臨む姿勢を身に付けさせ、フィリピンの諸問題について多角的に捉えることができると考えた。このほかにも、マニラ市に滞在経験のある本校の編入生に、日本人としてフィリピンでどう過ごし、現地の高校生が自国フィリピンについてどう考えていたか、などについて語ってもらった。

本校の外国人講師でフィリピンマニラ市出身のアガウィリ・ベルナデット氏から継続的な支援をいただけたことも研修の充実につながった。フィリピンの地理的・歴史的な講話や、交流校とのディスカッションに備えたワークショップをしていただき、フィリピン人として日本で働くことや国の政策などについて幅広く講話をいただいた。なお、アガウィリ氏の協力のもと、予定していた新たな学校交流はタール火山の噴火に伴い中止となってしまったが、別の機会や方法での交流を模索していきたい。

また、前年度研修の反省として「フィリピンの高校生と比較すると自分たち日本人は、アイデンティティーも含め、自国の文化や政治などについて十分に説明ができない」という意見があった。

これを受け、今年度の事前学習では例年のようにプレゼンテーションやディスカッションの準備、交流校でのパフォーマンスなどと並行させながら、「日本や日本人への理解」を深める時間や課題を設けた。

報告書トピック1：事前研修から学んだこと・考えたこと

事前の学習が始まる前までは、フィリピンは発展途上で、貧困問題を抱えている国であり、日本は先進国としてフィリピンを支援の対象としているイメージを持っていたという記述が多々見られた。しかし、事前研修の中で卒業生や専門の方の講演から情報を聞き、知識としてフィリピンの現状を取り入れる中で、フィリピンへのイメージが次第に変化している。初めは「貧困」のみに注目していたが、貧困が事実として存在する一方で、そこに「格差」や「ギャップ」があることに疑問を抱くようになったなど、問題意識の変化が見られた。また、ある生徒はこれらの言葉を「概念」として捉え、4泊5日間のフィールドワークで使うべき視点として据え置き、自分なりに抱いた疑問の答えを探っていこうとする姿勢が見られた。研修に参加する生徒全員が、このように事前研修の中で「視点」を見いだせたわけではないかもしれないが、幾人かの研修参加者は事前の研修を経て、フィールドワークを充実させるために必要な資質をある程度備えられたと言える。

報告書トピック2：フィリピン訪問中、および訪問後に考えたこと。新たな発見や、考えが改まったこと。

複数の生徒に共通して、人から聞く話だけでは表面的な理解しかできないということが分かったという記述が見られた。実際に現地の人間の表情、言葉、ゴミの臭いなど、自分の五感で捉えて、初めて表面的理解から実感へと変化し、一歩先以上に進めるというフィールドワークの重要性について記述している。

また、フィリピンの子どもや同じくらいの高校生との交流を通じて、いろんな目線に立って比較をすることで新たに考えさせられることがあったという意見は、例年と共通している。例えば、「幸せ」とは何かということである。自分たちの考える問題解決の方策や支援の向かう先にある幸福が、いかに現場のことをよく知らないで想像してしまっているかということを語っている。さらに、日本で享受している様々な「当たり前」が、本当に恵まれた環境であり、いかに安全で充実したものであるかを思い知ったという記述も見られる。

現地でのフィールドワークで、様々な衝撃と知見を得て自分たちの無力さを感じると同時に、高校生として何ができるのかについて真剣に思考した様子が窺える。

報告書トピック3：課題研究とのつながり

「教育」をテーマにしている生徒の記述からは、必ずしも研修の全ての内容と課題研究につながりがあったわけではないが、研修を通して、問題の根本的な解決のための課題設定ができていなかったとある。

日本では中学校までの教育を「義務」として当然のように受けられるが、中には嫌々学校の授業を受ける実態がある。それに対して、フィリピンではK to 12カリキュラムとなり13年間の義務教育があるにも関わらず、貧困や婚姻などが理由で学校へ行けなくなる事実もある。生徒は、フィリピンの高校生や子どもとの交流から、生の声を聞き、自ずと自分たちの学校での様子と比較したようである。もちろん、日本国内の学習への姿勢や学習要領を良くすることは課題として解決していかなければならないが、フィリピンの現状を目の当たりにし、より根本的な問題に目を向ける必要性に気付くことができたとある。

フィールドワークで現地へ行く前までに多様な情報を得て、それらを咀嚼し、自分の中のフィリピンに対する偏見を払拭しようとしたり、感じた疑問についてさらに答えを探ろうとしたりする様子が見られた。現地での教育機関や訪問先での交流を通じて、新たな知見を得ると同時に、多くの

生徒が知識不足や準備不足を感じていた。五感を通して捉えたフィリピンのマニラ市やパヤタス地区から、それまでの発展途上国への見方や支援の在り方、人々の幸福の定義などの考え方について改める機会であったことは間違いない。研修を経て、生徒たちは現地で発生している様々な問題の影の部分に触れ、それらも含めてフィリピンを取り巻く諸問題が今後どのように変化していくであろうか、そして、高校生の自分たちに何ができるのかと思いをはせる様子が窺えた。

今年度の研修参加生徒の中から本研修についてインタビューを行った。5年生の女子生徒から1名、4年生の男子生徒、女子生徒から1名ずつ、合計3名の生徒から聴取した。以下にその内容を示す。

Q1：フィリピン研修への参加動機は何か。

5年女子生徒

もともと知っていた ICAN が行き先にあった。小さい頃に寄付したことがあった。ICAN の活動が、自分の研究に関係がある。

4年生のときの留学生がフィリピン出身の子で、仲が良く、興味があった。裕福な家庭の子だったので、フィリピンに貧困が本当にあるのか興味があった。行ってみて、すごい格差を感じた。また、途上国に行ったことがなく、行ってみたかった。

4年男性生徒

課題研究は水道の民営化だったが、フィリピンは既に民営化済みであるので参考になると思った。研修には楽しさもあると想像したが、それよりも、違う生活環境を見てみたいと思った。自分の住んでなかった地域が、知っているものとどれほど違うのかを目で見て確かめたかった。

4年女子生徒

夏にケニアへ行ったことがあった。そのとき、都会があったことが意外だったが、郊外へ行けばすぐに格差が感じられ、道のわきで生活している人がたくさんいた。第三の視点として、新興国にも行ってみたいと思っていた。

Q2：学校が設定した研修の機会を利用してフィリピンへ行こうと思った理由はあるか。

5年女子生徒

外部の NPO の団体を通じてカンボジアに行こうと試みたことがあるが、それは落ちた。勝手なイメージではあるが、外部の団体では帰国子女などを落としがちではないか？と思うことがある。学校では生徒を皆平等に扱ってくれるので、学校の機会を通じて今回行くことができた。学校が行う意義はあると思う。

4年男性生徒

自分だけで企画して行けないところがあると思う。学校の先生が選ぶ場所や施設は、何らかの意図が含まれているだろうし、それを受けてみたいと思った。

4年女子生徒

研修に参加する人同士で互いに刺激し合い、違う人の視点も見られることを期待した。

Q3：実際にフィリピンを訪問して印象に残った訪問地はどこか。

5年女子生徒

ICAN は研究との関連が強かった。寄付が本当に使われていることが分かり、効果があることが分かった。一方で、寄付したお金の動きについて具体的に知りたかったが、具体的な数値ではあまり知ることができなかった。

ADB を訪問して、フィリピンの中にこんなにも現代的な建物があったのかと驚いた。様々な話を聞

いて、ADBの活動自体に興味を持った。

4年男性生徒

ICANのドロップインセンターが最も印象に残っている。ADBも施設の充実、職員の質の高さと、マニラ市との差を感じた。ホテル前の海辺でストリートチルドレンからスリに遭い、取り返すことはできたものの、自分が攻撃的になってしまったことにもショックだったし、ICANの子どもと何ら変わらないということにも衝撃を受けた。ICANの子どもたちは自分たちを暖かく迎え入れてくれたが、日々を生きるために彼らもスリなどの犯罪を過去にしてきたであろうと想像し、研修を受けるに当たって準備してきたはずなのに全く自覚が足りなかった。その現実気付いて、ある意味よかった。

4年女子生徒

パヤタスのスモーキーマウンテン跡地での学びは大きかった。

ディスカッションテーマも海ゴミについてであったので、それなりに情報収集をしてきたつもりだった。しかし実際に目で見てみると、隠れている部分が多々あることを知った。話で聞いていたこと、情報で見聞きしてきたことと、こんなにも違うのかと思った。何より、ゴミ山は政府が動いた上での状態であることに驚いた。想像を超えて、根強い問題であるということが分かった。事前を知る情報と、実際に目で見て確かめたときの差、つまりギャップがあるというのがパヤタスを訪問して思ったこと。

Q4：現地校との交流活動についてどう思うか。交流の中で刺激を受けたことや印象的だったことは何か。

5年女子生徒

プレゼンテーションをする意味はあるのか。Q&Aなどもなく、もっと意見が欲しかった。自分は英語が話せるので、語学力向上のためのプレゼンテーション機会であるならば必要ないと感じる。もっとディスカッションをしたかった。

ディスカッションの中で、フィリピンの人もゴミ問題に関心があることが分かった。

フィリピンの学生は自分の国に誇りを持っていて、自国の食文化や言語の在り方についてよく知っており、いかに日本人が「日本」について知らないかを思い知らされた。

4年男性生徒

ゴミ問題は、予想よりも話が弾んだ。分別については事前にアガウィリ先生から聞いていたが、実際にそのようだった。つまり、学校では学ぶし、取り組む意識もあるが、家に帰ると自分たちも含めて分別をしなくなるということが、交流校の生徒からも確認できた。

4年女子生徒

生徒と話をしていて、ゴミ処理場が不十分であるという印象が残った。

推測だが、交流校の生徒の親に分別やゴミへの意識がないようだった。

ゴミ問題については、事前に聞いていた情報と合致する部分が大きかったので、交流の意義を感じる瞬間だった。

Q5：フィリピンの貧困の実情について、もっと知りたかったこと、聞いたかったことはあるか。

5年女子生徒

マニラ以外の地域がどうなっているのかなど、他の地域についての知識をもっと学んでおくべきだった。「観光」についてのトピックがあったのにも関わらず、そうした知識が乏しく、詳しく話すことができなかった。

フィリピンの学生とディスカッションをするために、自分たちでもっと議論を深めて、意見を広げ

たり固めたりしておくべきだった。

4年男性生徒

政府がどう考えているのかを知りたかった。ADBを訪問して、解決している問題とそうでない問題もあると知ったが、あくまでADBがまとめている情報からである。

4年女子生徒

地学の授業でも同様の地域の最低賃金・労働について学習したことがあり、この研修での学びとリンクする部分があってよかった。雇用の在り方がどうなっているのか、例えばパヤタスの家庭訪問では、旦那さんが仕事を失って住み込みの日雇いで働いていたが、それまでどんな環境で働いていたのかなど、実態をもう少し知りたいと思った。

Q6：フィールドワークも含め、研修全体でもっとこういう機会や事前の学習が欲しかったというものはあるか。

4年男性生徒

ICANの池上さんのお話を聞いて、どんなに話を事前に聞いていても、ショックなものはショックということだった。いつもよりも実施時期が異なることもあったから、スケジュール的にしょうがないと思う部分はあった。

4年女子生徒

受け身になってしまっていた。「イメージを固めてもらえたら」と先生からあったし、先輩や外部の方からもたくさん話を聞いたが、行く直前まで漠然としていた。直前に学年のスキー合宿があったこともあるが、フィリピンへ行くという実感が湧いていなかった。

逆に、数多ある情報のどこから手をつけてよいか分からない状態もあった。

自分の準備も足りなかったが、先輩たちの行ってきたことを「なぞるだけ」になってしまった気がする。

Q7：自身の課題研究との関わりについて。

5年女子生徒

寄付教育のためのプログラムを作っている。寄付する際、人は自分が寄付したお金がどこにいつているのか不安を抱く。こうした不安に対して、ICANで見えてきたことを伝えることができると感じた。寄付金が公正に使われていることを知ることができた。

Q8：今後の自分の進路に関わるか。

5年女子生徒

ADBの活動など、そこで行われていることに、とても感銘を受けた。

ADBのような活動をしてみたいと思っている。

4年男性生徒

日本に帰ってきて「普通」に戻ってしまった。あんなにも現地で衝撃を受け、困惑し、時には憤りも覚えたが、日本に帰ってきてからは、いつも通りの、授業や課題でいっぱい日本の高校生になってしまった。

自分がアクションを起こせるという発想は、今はない。まだ高校生だからということもあるが、「忘れない」ようにしたいとは思っている。

4年女子生徒

進路に関わるかは分からないが、今回のフィールドワーク中に病院へ行ったときに「理不尽」を知った。病院は驚くほどキレイだったし、医者もいることは見受けられたが、3時間も待たされて打

ちひしがれた。引率してくれたツアーガイドの人から、まだ病院の仕組みが整っていないという話を聞いた。確かにその通りだと思った。さらに、病院へ行く途中のインフラが整っていないくて、20分の道が40分もかかった。

発展すると次の課題が見えてくる、これが今、自分の中でかなり意識の中に根付いていることです。

SGH 海外研修フィリピンフィールドワークの5年間

本校 SGH の大テーマのうち「教育」と「リスク」の二つに焦点を当て、課題研究とも関連付けながら、マニラを中心とするフィリピンについて、また日本との様々な関係について、生徒と共に理解を深め続けてきた。年度ごとに引率者や参加生徒は異なるものの、現地の変化については記録や参加経験者による講話などで共有し、フィリピンと日本の未来について、考える問題と課題について議論を重ねてきた。

5年間の研修期間で、フィリピンの教育に関しても様々な変化があった。特筆すべきは K to 12 カリキュラムの導入によって教育事情が大きく変化したことである。5年間継続して交流した Colegio de Santa Monica de Angat (以下、CSMA) では、初年度の交流内容から比較すると、その影響は明らかだ。

フレームワークを頼りすぎることは慎重となるべきであるが、かつて日本国もそうであったように、総合的な学習の時間を参考にし、課題研究の仕組みを取り入れたフィリピンの教育の質は格段に上がっている。その証拠に、初年度は幾分不慣れな研究プレゼンテーションであったものが、この5年間で本校生徒の課題研究の質と何ら変わらない研究内容や成果物の作成をしており、プレゼンテーション力の向上が窺え、タイムリーな社会問題をテーマとしたディスカッションなどを、対等あるいはそれ以上に行えるようになっていた。このことから、仕組みづくりと、それを教員が十分に機能させることが、いかに重要であるかが分かる。

また、CSMA は初年度から本校の研修チームを歓迎してくれており、交流日の午前中は必ず歓迎のパフォーマンスを開催して下さった。研修の2年度目からは、本校の生徒たちもダンスのパフォーマンスをしたり、大縄跳びなどの現地の高校生も参加できる日本の競技や遊びを披露したりして、お礼の気持ちを示した。CSMA の手厚い歓迎を受けるたびに、本校も諸外国の学校を受け入れて国際的な交流をする際には、もっと準備に時間をかけて誠実におもてなしをするべきだと反省の念にかられる。5年間のフィリピン研修の中で、国民性や学校事情の違いを知ることができたことも大きい。

研修5年目の利を活かし、本研修に参加したことのある卒業生を招いて「フィリピン経験者交流会」を実施した。現役の研修参加生徒に還元するという意図もあったが、本研修を経験した卒業生が、フィリピン研修での体験や学びが、大学での研究や取り組んでいる活動に、何かしら活かしているかなどを知る機会でもあった。卒業生の一人は、この研修をきっかけに大学進学後にフィリピンへ定期的に足を運ぶようになり、NPO 法人とも関わりながら活動をしている。このことから、進路の選択に直接的であるにしろないにしろ、研修での学びや経験が活かしていることが分かり、本研修の成果の一つと考えてよいであろう。

フィリピン研修に参加した生徒は、固定観念や偏見が自分たちの中になんかあることに気づき、それらのいくつかを払拭、あるいは捉え直し、視点を新たにしようとする傾向が見られる。各年度の研修報告書から共通して見られるのが、1週間弱のフィールドワークでフィリピンを「知った気にならない」ようにしたいという記述である。これはもちろん、1週間弱という短い期間だからということでもあるが、彼らは現地を五感で感じ、リアルに物事を捉えることで初めて認識できることの多さについて綴っている。さらに、表現こそ少しずつ異なるが、今年度の研修生徒の言葉を借りるなら「一つ事実を掘り起こせば、またその次に隠れた問題や事実がある」ということである。

パヤタスのゴミ山を実際に自分の目で見て、通訳の人の言葉を介してはいるが、現地の人の言葉と表情、身振り手振りも見ながら聞き、ニュアンスまで感じ取る重要性、ひいてはフィールドワークの必要性を多くの生徒が口々にしている。日本国内や SNS で知り得る情報も決して間違いではないかもしれないが、現地をノンフィルターで見ると、それ以上に見えてくる事実があることをフィールドワークで知るのである。

そして、研修を経て日本の学校生活での「学び」や問題の捉え方に対して視点を新たにした生徒も多い。普段の授業や課題を、ただ単に「負担」と考えるのではなく、大変だけど学びのあることと考えられるようになりたい、教育とは与えられるものではなく自らが意欲的に得ようとするべきものである、と学ぶ姿勢の見直しをしている。1週間弱の現地でのフィールドワークで歳の近い学生との交流を経て、学びの原点を再認識する生徒がいる。年度によって差はあるが、こういったことに触れている生徒は例年見られ、共通していると言える。

一方、今年度インタビューをした4年生の生徒は、フィールドワークを終えて日本に帰ってきたら、あまりにも簡単に元の日本人高校生に戻ってしまったことに驚いていた。補足するように、それでもフィリピン研修を通して得た気付きや衝撃は後の自分に影響があると思う、とも語っていた。フィリピン研修での体験や学びが今後の彼らに生きるかどうかは、当然ながら個人差がある。また、フィリピン研修が進路に影響するかという問いに対し、大学進学などに影響するかはまだ分からないが、今後の自分の行動や、物事を決める選択肢の中に影響してくると思う、と語っていた。

本研修が生徒のいくつかの資質・能力を育んだことは確かであるが、フィールドワークの目的にある「国際的な課題研究の発展」に寄与することができたかは、評価が分かれるだろう。しかし、フィリピンという国を知ることを通して、今まで見えていなかった日本や日本人、自分自身について思慮するという視点に立てた生徒がいる。「国際」とは、自国と他国が存在して初めて成り立つ言葉であり、他国だけでなく、そもそも自国をしっかりと捉えていることが大前提である。そして、生徒たちが述べているように、他国を知ることによって自国を知ることができる。フィリピンと日本の差異を捉えることで、自国である日本、そこに住む人々について考えを深めながら潜在する様々な問題に目を向けていくことは、国際的な課題研究の入り口に立っていると言えるのではないかな。

主要な訪問施設・機関	訪問年度					回数
	2015	2016	2017	2018	2019	
Colegio de Snta. Monica de Angat (CSMA)	○	○	○	○	○	5回
フィリピン教育大学 (PNU)	○	○		○		3回
JICA フィリピンオフィス	○		○	○		3回
アジア開発銀行 (ADB)	○	○			○	3回
NPO 法人 アイキャン (ICAN)		○			○	2回
認定特定非営利法人 ソルト・パヤタス			○	○		2回
フィリピン日系人リーガルサポートセンター (PNLSC)		○				1回
Verlanie (孤児院)	○		○			2回
アヤラ美術館		○				1回
国立博物館		○		○	○	3回
Manila American Cemetery And Memorial			○			1回
コレヒドール島	○					1回

③ 香港・深圳研修 <中止>

- ・今年度は香港がデモ、深圳が新型コロナウイルス、その代替案であった関西フィールドワークも臨時休業により中止となった。
- ・4年生8名・5年生4名の12名が海外研修に、4年生13名が関西フィールドワークに行く予定であった。
- ・生徒の課題研究の深化や検証のための研修・調査を1国2制度を持つ国香港と、中国側の深圳にて「葛藤と軋轢」をテーマに行う予定であった。
- ・本年度は事前学習までしか実施できなかったが、その道の専門家に来ていただき、香港と深圳がいかに発展し、行動している若者が多い地域であるかが学べた。
- ・研究発表を英語で準備し、生徒同士でプレゼンテーション・フィードバックすることで英語での伝達・対話力を向上し、研究内容に対する建設的な意見交換も出来た。
- ・臨機応変にプログラムを変更したり、生徒の安全のために判断するプロセスの前例ができた。
- ・過去2年間の実施内容より、若者のエネルギーが強い、アジアの発展が進んだ複数の地域で、生徒たちが新たな視点を得て価値観が変わるようなプログラムとなった。
- ・本校で全ての企画・運営を行っているため、幅広い交流先（中学生、高校生、大学生、企業やNGO等）で研修を行うことが可能となった。
- ・今後の課題としては、資金面、運営面、交流先との関係の継続、例えば Skype の交流だけ実施という可能性も視野に入れて、プログラムの継続方法を模索する必要がある。

本年度の香港・深圳研修が中止に到るまでの経緯と、過去2年間の実施による成果について述べる。

(1) 中止までの経緯

第1案：香港・深圳研修 まずはこの要項で生徒募集をし、書類審査、面接による選抜を行なった。
実施概要

目的：『SGH 海外研修香港・深圳 FW』は、「ISS チャレンジ」の SGH 部門に応募し、課題研究に取り組んでいる生徒を対象として、生徒の課題研究の深化や検証のための研修・調査を1国2制度を持つ国香港と、中国側の深圳にて「葛藤と軋轢」をテーマに行う。Diocesan Boys' High School と IB World School 同士として交流し、隣接する中国の急成長を遂げた街、深圳を訪問し、日本人学校の生徒と交流することで、国や発展等、様々な視点による葛藤と軋轢の学びにつなげる。特に日本人の「中国」という国のイメージに対して一歩踏み込み、中国内の民族を含めた葛藤と軋轢も意識した研修にする。現地の人々の生活や考え方を实际的に捉え、また研究交流の機会を得ることで国際的に通用する課題研究の発展を促す機会とする。

1. 期間 2020年2月5日（水）～8日（土）3泊4日
2. 場所 中華人民共和国 香港特別行政区、深圳
3. 主たる訪問先

香港：Diocesan Boys' School（拔萃男書院）IB World School、深圳（中国）：深圳日本人学校

4. 引率教員 2名
5. 旅程・内容

出発：羽田空港国際線ターミナル 2020年2月5日（水） 8:30 ごろ（予定）

解散：羽田空港国際線ターミナル 2020年2月8日（土） 21:45 ごろ（予定）

< 行程表 (予定) >

日時	交通機関	訪問地等	食事
2/5 (水)	航空機 専用車	羽田空港集合、空路にて香港国際空港へ 香港歴史博物館見学、市内レストランにて夕食 (香港泊)	機内 夜○
2/6 (木)	公共交通 機関利用	ホテルにて朝食 Diocesan Boys' School 訪問、IB 校高校生と交流 市内研修 (街歩き / 研究内容に関連する団体等訪問)、昼食 市内にて夕食 (香港泊)	朝○ 昼× 夜×
2/7 (金)	公共交通 機関利用 / 専用車	ホテルにて朝食 香港から深圳へ 深圳日本人学校訪問、市内研修 (電気街華強北)、昼食 深圳から香港へ 市内にて夕食 (香港泊)	朝○ 昼× 夜×
2/8 (土)	専用車 航空機	ホテルにて朝食 チェックアウト後、市内研修 (街歩き / 研究内容に関連する団体等 訪問) 専用車にて香港国際空港へ 空路にて羽田空港へ 到着、通関手続後 解散	朝○ 昼× 機内

主な研修内容 (予定)

- ・ Diocesan Boys School (IB school 抜萃男書院) : IB 校の同年代の生徒と交流 (プレゼンテーション・ディスカッション・キャンパスツアー)
- ・ 深圳日本人学校 : 同じ日本人、でもそれぞれの課題意識が様々である中で、日本の高校生が持つ課題、深圳に暮らす中学生の課題を共有し、交流する。また、葛藤と軋轢という面で、深圳が直面している先進的な部分と課題点を両面から議論する。
- ・ 市内研修 : 雨傘運動やイギリス統治時代等について現地で考える
- ・ 香港歴史博物館 : 展示から歴史を学ぶ・電気街華強北 (予定)

事前指導

- 9 月 昨年度香港研修参加者より講話
香港・深圳の事前学習 (2019 年度の生徒の事後学習とともに)
- 10 月 大学よりゲスト講師
訪問先について各自調査 (分担)、訪問先アポイントメント
- 11 月 Diocesan と日本人学校にての交流準備 (ディスカッションテーマ検討、課題研究発表準備)
- 12 月 新書購読課題 *冬季休業中課題
- 1 月 訪問準備、香港・深圳の理解を深める

事後指導 振り返り、Global Café にて発表、研修のまとめ、その他報告

6. 参加生徒 参加条件

- ・ 各自の課題研究に必要な情報を実地に収集する FW を軸とする。ISS チャレンジ (SGH 部門) にエントリーして課題研究をすすめていることを原則とし、提出課題の評価の高い生徒を優先する。
- ・ また、次年度の研究を同じテーマで継続することを条件とする。

- ・調査・インタビュー時はすべて英語を使用する。よってそれに見合う英語力を有することが必要である。
 - ・今年度のフィリピン研修に応募していないことを条件とする。
 - ・宿泊費の一部として3～4万円程度、現地での食費として1万5千円程度、その他任意保険代、パスポート取得、羽田空港までの移動費などの諸経費も自己負担とする。(自己負担額は変更になる可能性があります) 交通費(往復の航空券および現地での移動にかかる費用)と宿泊費、その他現地での研修費や学校保険代はSGH経費として支出。
 - ・保護者の承諾書を事前に提出する。
 - ・事前学習・事後学習に参加する。
- *昨年度のSGH海外研修参加者も応募資格がある。

参加人数と申込み

募集人員 東京学芸大学附属国際中等教育学校 4～5 学年生徒 最大 12 名

- ・7/22 (月) 研究代表者ミーティングにて概要アナウンス済み
 - ・7/25 (木) の夕方 ISS チャレンジ SGH 部門エントリー生徒にメールで申込フォームを配信
 - ・8月10日(土) 17:00 までにメールにて参加希望申請書提出 sgh@tguiss.jp
- 「申込みフォーム」記載内容の、①志望動機②課題研究との結びつき③研究の進捗状況から審査をし、面接も同様に3つの観点で審査する。
- ・生徒参加条件

- ・各自の課題研究に必要な情報を実地にて収集するフィールドワークを軸とする。ISS チャレンジ (SGH 部門) にエントリーして課題研究をすすめていること、来年度も継続することを原則とする。
- ・調査・インタビュー時はすべて英語を使用する。よってそれに見合う英語力を有することが必要である。
- ・交通費(往復の航空券および現地での移動にかかる費用)と宿泊費はSGH経費として支出。宿泊費の一部と食費・任意保険代は本人負担。
- ・食費、パスポート取得、羽田空港までの移動費などの諸経費は自己負担とする。
- ・保護者の承諾書を事前に提出する。
- ・事前学習・事後学習に参加する。

- ・参加生徒選抜状況

- ・香港研修参加希望者は15名。自己負担額を調整し、昨年同様12名程度の定員とした。
- ・審査は「志望理由書」「研究計画書」「研究の進捗状況」「面接」によって行った。
- ・書類と面接については選抜の観点を用いて評価した。(後掲「海外研修参加者選抜基本方針」参照)
- ・面接はSGH委員会の教員とSGHグループの教員が2名一組となって行った。

当初はデモが決められた時間と場所で行われており、特定できる状況であった。継続的に情報収集を、ニュース、旅行会社、外務省など多方面から行い、状況を把握。管理職や管理機関とも相談。11月初旬に学生の死者が出てから大学生と警察の衝突が激化。現地の学校が休講としたところで、本校としては生徒の安全の確保が難しく、現地の学校との交流も難しいと判断したため、香港訪問は中止、深圳のみで4日間研修を行うこととした。保護者会を12月12日に開催し、研修内容の変更についての説明を行なった。

香港安全情報タイムライン		JETRO・外務省・在香港日本国総領事館 HP 等より抜粋
月日	動向 負傷者等	抗議活動 その他
2019/11/15	現地 70 歳男性 デモに巻き込まれ死去	香港中文大生 高速道路の封鎖 MTR 駅多数封鎖 (西湾河・旺角)
2019/11/14	香港内全校休校	沙田裁判所 放火事件
	スウェーデン・ノルウェー デンマーク 交換留学生の 帰国勧告	香港理工大学内で催涙ガスの使用 衝突 複数大学で講義キャンセルやオンライン講義に変更
2019/11/13	在香港日本領事館 来館見合わせ通知 香港島 (ハッピーバレー) 競馬キャンセル	クロスハーバートンネル入り口 (紅磡～銅鑼湾) 火災 通行止 ショッピングモールでデモ激化 ●香港島 国際金融中心 (IFC), 太古広場, 信徳中心, 西港城, 香港仔中心 ●西九龍 圓方商場, 朗豪坊, 新世紀広場, 又一城 ●東九龍 淘大広場, 徳福商場, APM, POPCORN, 東港城, 新都城 ●新界南 愉景新城, 荃湾広場, 湾景広場, 如心広場, 荃新天地, 緑楊坊, 新城市広場, 沙田広場, 沙田中心, 好運中心, 青衣城, 東薈城 ●新界北 大埔超級城, 名都商場, 上水広場, VCITY, 屯門市広場, 天水圍天耀広場, 元朗広場
2019/11/12	邦人負傷 デモの撮影禁止の注意再喚起 中国 (本土) 台湾 フィリピン人留学生 大量帰国	香港中文大生と警察が衝突 西湾河で警察の実弾発砲 重傷者 九龍塘 ショッピングモール 火災 警察が一日で 1500 発以上の催涙弾使用 逮捕者 140 名強
2019/11/11	警察が発砲 抗議者重体	
2019/11/08	香港科技大学生 転落死 警察の強制排除中	市民と香港の対立が修復不能 暴力の連鎖続く
2019/11/04	林長官と習近平会談	
2019/11/03		九龍半島 (大ボ, 沙田) 香港島 (太古一帯) 抗議者と警察間で対峙・衝突発生 太古城中心閉鎖 市民同士の争いの結果, 負傷者
2019/10/23	引渡し条例改正案正式撤回	
9 月末	JETRO 日本企業と日系企業の 580 社 にアンケート実施	デモ・抗議活動によって直接的な影響を受けている在香港の日系企業等は約 4 割。小売および飲食など非製造業企業において業績が悪化。既に約 4 割の在香港の日系企業等が、不要不急の出張を抑制するなどの対応策。

第2案：深圳研修 昨年度から深圳にも訪問していたため1日間の交流・訪問先はあったが、その他の日程の追加の訪問先を探した。

実施概要

目的：『SGH 海外研修深圳 FW』は、研究の校内コンペティション「ISS チャレンジ」の SGH 部門に応募し、課題研究に取り組んでいる生徒 12 名が参加するものである。生徒の課題研究の深化や検証のための研修・調査を、中国の深圳にて「葛藤と軌轢」をテーマに行う。急成長を遂げた深圳の街を知り、企業を訪問し、日本人学校、IB 校 Shekou International School, 深圳大学と交流することで、発展やイノベーション等、様々な視点による葛藤と軌轢について学び、研究を深化させる。現地の人々の生活や考え方を实际的に捉え、また研究交流の機会を得ることで国際的に通用する課題研究の発展を促す機会とする。

1. 日程：2020年2月5日（水）～8日（土）3泊4日
2. 場所：中華人民共和国 深圳
3. 訪問地：深圳日本人学校、深圳大学、Makeblock Co. Ltd., Shekou International School, Vista-SK クリニック, 市内散策(華強北 Huaqiangbei), Royole 社、etc.
4. 生徒：12名, 引率教諭：2名
5. 行程表 出発：羽田空港国際線ターミナル 2020年2月5日（水）ANA923便
解散：羽田空港国際線ターミナル 2020年2月8日（土）ANA924便

日時	交通機関	訪問地等	食事
2/5 (水)	航空機 専用車	7:30 羽田空港集合、空路にて広州国際空港へ (ANA923便 羽田9:25発・広州13:50着) 移動 17:00 ごろ到着、ホテル周辺レストランにて夕食、ホテルへ	昼 機内 夜○
2/6 (木)	専用車	ホテルにて朝食 9:30- 12:30 Shekou International School 訪問 昼食@海岸城 グループ1 14:00-15:00 VISTA クリニック訪問、深圳湾創業広場 グループ2 14:30-16:00 Makeblock 社訪問 16:30-18:00 Royole 市内にて夕食	朝○ 昼× 夜×
2/7 (金)	専用車	ホテルにて朝食 9:30-13:00 深圳日本人学校訪問、昼食 14:50-16:30 深圳大学訪問 17:00- 華強北見学、市内にて夕食	朝○ 昼× 夜×
2/8 (土)	専用車 航空機	ホテルにて朝食 9:30 チェックアウト後、専用車にて広州国際空港へ 空路にて羽田空港へ (ANA924便 広州15:05発・羽田20:00着) 到着、通関手続後 解散	朝○ 昼× 夜 機内

主な研修内容 [全体]

- ・ Shekou International School : IB 校の同年代の生徒と交流 (プレゼンテーション・ディスカッション)

- ・深圳日本人学校：同じ日本人、でもそれぞれの課題意識が様々である中で、日本の高校生が持つ課題、深圳に暮らす中学生の課題を共有し、交流する。葛藤と軋轢について議論する。
- ・深圳大学：生徒たちの研究テーマを深圳と日本の両面から再検討し、テーマの理解を深める
- ・Makeblock、VISTA-SK：それぞれで研究に関する質問をし、専門家から知識を得ることによってより一層考えを深める
- ・Royole 社、市内研修（電気街華強北）：イノベーションがいかにして起こるかを、企業や街を見学しながら考察する

事前指導 *1月10日まで実施済み

- 9月27日（金） 香港深圳についての基本的な理解、顔合わせ、次回高須正和様（深圳のメイカーズエコシステム）講演に向けての事前準備
- 10月7日（月） 香港深圳についての基本的な理解、訪問地調査
- 10月18日（金） 訪問先について共有・相談、訪問先アポイントメント、香港深圳について学ぶ
- 11月18日（月） 訪問先について各自調査（分担）、訪問先アポイントメント、香港深圳について
- 11月21日（木）高須正和様 ニコ技深センコミュニティ Co-founder 「コピーする深センからコピーされる深センへ」
- 11月27日（水） 立教大学倉田先生講演会、新書購読課題
- 1月10日（金） 深圳について学ぶ、日本人学校・Shekou International School・深圳大学にての交流準備（ディスカッションテーマ検討、研究発表準備）
- 1月20日（月） 訪問準備、深圳の理解を深める 1月29日（水） 最終打ち合わせ

事後指導 2月14日（金） 振り返り、研修のまとめ、2～3月 Global Caféにて発表、報告

深圳研修にシフトすることで、新たな訪問先として **Shekou International School**、深圳大学、**VISTA-SK**、**Royole** に訪問アポイントメントをとり、1月6日～8日に実地踏査をして現地のホテルと訪問先への挨拶を済ませた。事前学習も1月10日まで順調に進み、生徒もプレゼンテーションの練習を事前学習以外のところでも実施していた。新型コロナウイルスが武漢にて発生、1月22日時点で中国の感染者は440名、死亡者9名。1月23日には出発前保護者会が開催されたため、以下のように説明。

2020年1月23日（木） S G H 深圳研修 事前保護者会

- ・新型コロナウイルスによる肺炎発生に伴う現時点での判断

<現状での判断要素>

- ① 深圳でも複数の感染・発症例が確認されているが、現在隔離治療中である。
- ② 外務省の武漢以外での感染症注意レベルは1「十分注意してください」である（武漢については不要不急の渡航を禁じるレベル2である）。
- ③ 全日空便は「武漢」便は欠航。広州便は運航を中止する予定は現段階では知らされていない。
- ④ 中国政府は武漢の空港を閉鎖し、武漢市内への出入りを原則禁止している。
- ⑤ 現在春節中の中国および中華文化圏の人々が世界中を旅行しており、日本と深圳の危険度が大きく違うとは言えない（日本への旅行者も多いので感染の危険は日本においても否めない）。
- ⑥ 現時点では交流先の学校から危険性や交流不可能な状況を知らせる情報はない。
- ⑦ 各交流先の web サイトなどにも特別なアラートは現在出していない。

<現在での判断>

予防・防止に努め、十分注意して研修を実施する。

<予防・防止策>

- ・出発前の土日を含む休日での十分な休養＝体調を整える。
- ・マスク着用
- ・手洗いやミネラルウォーターでのうがいの徹底
- ・移動は借り上げ車両（バス）・駅などの混雑している人ごみは可能な限り避ける。
- ・人が多く密集するような室内に長時間滞在しない。

<直前での渡航禁止や警戒レベル引きあげの場合の判断>

- ・WHOの緊急事態宣言が出た場合の日本政府・中国政府の対応を確認
- ・航空会社の対応を確認（旅行会社の対応を確認）
- ・管理機関（大学）に報告し、指示を受ける
- ・校長による最終判断

1月26日、外務省の感染症注意レベルは中国湖北省全域がレベル3に引き上げ。その他交流先から中止、休校の連絡を受け、以下の理由を総合して中止と判断。

- ① 武漢を含めた湖北省が「渡航禁止」となった。感染者数の増加によっては、他の省の渡航警戒レベルが上がる可能性もある。
- ② 現在発表されている中国の都市の中では深圳での感染者数は多いほうである。
- ③ 深圳で「無症状」の感染者が発見されており、こうした無症状の感染者が市内にいれば、感染のリスク回避が難しい。
- ④ 交流先であった深圳大学から感染のリスク回避のために、今回の交流を中止したいという申し出があった。
- ⑤ 現地インターナショナルスクールも現地教育施設管理機関の指示を受けて2/17まで休校となった。

その後の動き：

- ・1/27（月）昼休み 生徒へ中止の連絡
- ・1/27（月）15:45 臨時SGH委員会 この後の対応を検討
- ・1/27（月）18:00 保護者に添付の中止のお知らせをメールにて配信
- ・1/27～2/7 SGHによるキャンセル料などのカバー状況、近ツリによる現地との交渉による発生料金の詳細確認 →渡航禁止とのこともあり、キャンセル料は発生せず

海外フィールドワークが難しくなったので、国内での「関西フィールドワーク」に変更。

第3案：関西研修 探究甲子園を見学し、その他関西の団体や大学等で課題研究を進める。

実施概要

目的：『SGH 深圳（国内関西）FW』は、研究の校内コンペティション「ISS チャレンジ」のSGH部門に応募し、課題研究に取り組んでいる生徒が参加するものである。生徒の課題研究の深化や検証のための研修・調査を、関西にて「葛藤と軋轢」をテーマに行う。急成長を遂げた深圳の街について知識を得た上で、関西の企業・NGO/NPOを訪問し、学生たちと意見交換・交流することで、様々な視点による葛藤と軋轢について学び、研究を深化させる。研究交流の機会を得ることで国際的に通用する課題研究の発展を促す機会とする。

1. 日程：2020年3月20日（金）（春分の日）～23日（月）（神戸市内3泊予定・終業式欠席）
2. 場所：関西 兵庫（神戸）・京都・大阪
3. 訪問地：検討中
4. 生徒：12名程度、引率教諭：2名
5. 行程表（案）

日時	訪問地等
3/20 (金)	朝 8:30 ごろに東京発、昼神戸着、移動 NPO ごみじゃぱんインタビュー
3/21 (土)	探究甲子園見学・市内研修
3/22 (日)	学校と交流 (研究発表) 関西学院大学留学生にインタビュー
3/23 (月)	子供多文化共生センター 14:00 ごろ発 17:00 着 東京

主な研修内容 (案) [全体]

学校交流 (高校生の研究を行なっている学校)・小学校 (外国人サポート・算数教育・自己肯定感)
ボランティア・フードロス 外国人サポート (小学校・医療)

- ・立命館宇治高校・立命館高校：課題研究を相互フィードバックできるか
- ・食品ロスダイアリー 神戸市と NPO 法人ごみじゃぱん食品ロスチーム協働 [京都経済短期大学並びに神戸大学経済学部、法政大学、岡山大学、NPO ごみじゃぱん、三菱 UFJ リサーチ&コンサルティングの共同チーム] が環境省の研究助成を受けて実施 → 京都経済短期大学 もしくは神戸大学経済学部 にコンタクトを取る ・市内研修

事前指導 2月末、3月中旬 訪問地検討、研究発表準備、最終打ち合わせ

事後指導 来年度 振り返り、研修のまとめ、Global Café にて発表、その他報告

日程の変更も伴ったため、関西フィールドワークへの参加可否を再度調査、辞退が4名。追加募集で5名の応募があり、2月27日放課後に打ち合わせ・面談を行う。フィールドワーク先も少しずつ決定し、参加者それぞれの研究テーマに沿った訪問先を確保。

2月27日夕方、政府による全国の小・中・高校への臨時休業の要請があり、2月28日に臨時休業に伴うフィールドワークの中止が決定。生徒に通知。

(2) 事前学習からの学び

研修は直前まで実施予定だったので、事前学習での学びは大いにあった。デモがどのような社会で起きるのかという香港の風潮に関する考察と、イノベーションがいかんして起こるのかを深圳のメイカー文化を学ぶことで考えた。ビデオや本からの学びも得たが(上記事前学習スケジュール参照)、以下は主に外部との連携から得られた学びについて報告する。

◆香港事前研修

(生徒の感想)今日のご講演ありがとうございました。先生のお話を聞いて印象に残っているのは、弱くても勝てるのが政治の世界だというキャッチフレーズです。観客を味方につけて、自らが自分達の魅力をアピールし、相手に対抗することで、たとえお金も力もない人でも政治を動かすことが出来ると聞いて、とても面白いと感じました。また、今日この写真だけは覚えて帰って欲しいと仰っていた選挙当日の朝の写真も印象的でした。投票をするために朝から並んで待っている状況は、日本ではまず見られない光景です。香港の人々の一人ひとりの政治に対する関心が高くて驚きました。最後に大陸と香港では全く社会の構造が違うということです。香港は元々イギリスの植民地であったことから、用いられる通貨、教育、行政、テレビ、言語まで違うことを知りました。特に、言語が違うことは知識として持っていましたが、実際の発音を聞いて全く違う言語を話しているように感じました。僕は倉田先生が執筆された本も読ませて頂きました。非常に興味深かったです。民主はないが、自由はあるのが香港で、参政権はないけれど、表現信教の自由があると極端に分か

れていて、香港はユニークな土地だと思いました。先生は最後に香港式の「自由の使い方」を日本も学ぶべきだとまとめていました。僕の解釈では、香港の自由とは「柔軟性」と「想像力や発想」「様々な文化への適応能力」であるととらえました。そこで質問です。日本が香港式の自由を見習うとして、日本がどういった取り組みをすれば良いでしょうか？取り組みができるか疑問に思いました。

（倉田先生の返事）今の日本社会には、具体的にどのような不自由があるでしょうか。香港と比べて、何が違うでしょうか。それを変えるためには、どういうことが必要ですか。

◆深圳事前研修（生徒の感想）

・中国に対する見方がまた変わったし、テクノロジーという視点からの知識が増えた。テクノロジーは自分から遠いものだと思っていたけれど、今日の講演を通して、身近なものだと感じた上に、もっと知りたいという気持ちになった。今後は、何に対してもテクノロジーという視点から考えてみたり、未来的な視点を持ち続けたいと思うようになった。メーカーフェアにも行ってみたい。

・深圳について実際の経験を基に話を聞くことができ、すごくためになった。私は今まで高須さんのようなお仕事をしている方に出逢ったことがなかったため、新しい知識を多く得ることができた。日本に住んでいるとつい、日本の中での話に注目しがちだが、今回の講演では他国についても色々知れた。貴重なお話ありがとうございました。

◆訪問中止になってしまった企業 Royole にメールで生徒の質問に回答していただいた。

<生徒からの質問とその回答>

1) 折りたためるスマホをなぜ開発しようと思ったのか。何故折ろうと思ひ、どうして思いついたのか。(Why did Royole made smartphone that has flexibility)

2) なぜ「柔軟」に焦点を当てているのか。なぜ物を曲げようと思ったのか？(Why does Royole focus on “flexibility”)

3) 今後は新たに何を開発したいのか。(What does Royole want to make in the future)

1) ~ 3) については、下記のリンクをクリックしたら、文章が読めます。文章は中国語ですが、その中に、英文の企業紹介ビデオはご覧になれます。そのビデオの内容はお答えになれるかもしれません。<https://mp.weixin.qq.com/s/HfrH7CISea5B9hj32W4eNQ>

そして、いくつかのマスコミ報道資料を共有させていただきます。その中に、お答えになれる内容があると存じております。

[折り畳むとスマホになるタブレット 中国企業が販売へ：朝日新聞デジタル.pdf] [2019 日本 NHK 報道柔宇 3 分版.mp4] [201811【日経商务周刊】.pdf] [20180125【ForbesJAPAN】 鍵盤和鼠标都已经成为过去式 68-69 页.pdf]

4) 生活に役立つアイデアが実現するまでどれくらいのスピードで達成できるのか。(速い場合) そのスピードには理由があるのか。

この質問についてですが、一般的なコンシューマー電子機器製品であれば、開発期間はアイデアから量産段階まで少なくとも半年から一年間くらいかかるそうです。弊社は半年くらいがかかって製品を実用化にさせた実績がございます。

理由は確かにいくつかありますが、上記の報道通りに、深センという都市はもともと電子業界のサプライチェーンが完備している都市だし、ここのスピードは速いとよく言われております。そして、紹介ビデオの中に紹介した通りに、弊社の戦略はフレキシブル技術を色々な業界で活用させた戦略ですので、現在展開している六つの業界に対して、それぞれの開発部署がおります。客先のニーズをいただいてから、それに一番詳しい対応できるチームが対応するができます。また、弊社の理念はとてもしノベーションを重視しておりますので、新製品開発するには、イノベーションの意識とチームワークの力両者を合わせて、スピードにもなれると考えております。

(3) 成果と課題

本年度実施内容より

◆成果

- ・事前学習でその道の最先端をいく外部の専門家に来ていただけたことで、わかりやすく理解しやすい講義を受けられた上に、丁寧に質問に1つ1つ答えていただけて学びが多かった。香港のデモに関しては、なぜ若者が立ち上がろうと思うのかという考え方の背景を教えていただいた。日本での「デモをやっても意味がない」という考え方ではなく「弱くても勝てます」が政治では成り立つ背景を解説していただいて、生徒たちは新しい考え方に気付いた。深圳ではメイカーが多く生まれる背景として、国からの援助はもちろん、部品が多く取り揃えられる市場の環境や、とりあえずプロトタイプを作るという行動力の早さがあることがわかった。中国版の紅白の映像で、いかにその技術革新が進み、それが盛大に全国に披露されているかがわかり、異文化理解にも繋がった。
- ・研究発表を英語で準備し、生徒同士でフィードバックすることで英語でのプレゼンテーション力を向上し、研究内容に対するフィードバックもお互いすることができた。
- ・香港や深圳について知らない生徒が多く、訪問する前提で調べることで、アジアの隣国の理解が深まった。
- ・臨機応変にプログラムを変更したり、生徒の安全のために判断するプロセスの前例ができた。

◆課題

- ・どのような社会の仕組みであるか、地域としての特色は何かと座学では学べたが、次のステップとしての、実際に現地で体感することができなかった。それを感じて本当にそれがわかっていたのか、見えていない部分があったのか、新しい視点が生まれるのかという点が、実際に行けるとよかった。
- ・継続的に交流できることになっていたはずの香港の IB 校 DBS 高校や深圳の日本人学校とは、研修中止により今年度は交流不可能となった。来年度もこの研修を実施し、もし出来なくても何かしら別の方法で交流を継続していきたい。
- ・SGH 指定終了後にどのように継続的に研修を実施していけるのかという資金面の課題。

過去2年間の実施内容より

◆成果

- ・アジアの発展が進んだ地域で、若者のエネルギーが強く、新たな視点を得て価値観が変わるようなプログラムとなった。
- ・香港から始まり深圳も研修先とすることで、1国2制度の香港内での「葛藤と軋轢」だけでなく、中国も含めることで時間的・空間的位置付けを含めた幅広い視点からの探求ができた。
- ・中学生、高校生、大学生、企業や NGO 等多様な団体で交流・訪問を実施し、そしてそれぞれが違う背景やナショナルティを持っていたため、複数の視点を持って「葛藤と軋轢」を考えられた。
- ・研究テーマに沿って訪問先を決定することで、より直接的に課題研究を深化させることができた。
- ・旅行会社の添乗なし・企画から運営までほぼ 100 パーセントを学校側のみで行った。こうした自主運営には現地の大学・学校・組織などの協力が欠かせない。

◆課題

- ・どのように継続できるか。資金面、運営面、交流先との関係の継続。例えば Skype の交流だけ実施という可能性も視野に入れて、プログラムの継続方法を模索する必要がある。

④ 本校での海外交流（長期留学生）

（１）留学生概要

・本年度の長期留学生：アジア架け橋プロジェクト インドネシア 1名、心連心 中国 1名
文部科学省・AFS アジア架け橋プロジェクトとして本校で受け入れた生徒は1名、インドネシアからの留学生である。2～3学期にかけて後期課程4年生（高校1年生）と共に学んだ。日本語はほとんど話せなかったところから、放課後は Japanese as a Second Language (JSL) クラスに通い、勉強してコミュニケーションを日常会話は問題なく出来るまでになった。

（２）高校生フォーラム

架け橋プロジェクトの留学生として高校生フォーラムのディスカッションに参加したり、ポスターセッションを聞いてまわったりした。同じインドネシアからの他校の留学生と会うことができ、それぞれの日本の生活を振り返りながら共有していた。本年度はアジア架け橋プロジェクトにて参加した生徒が少なくなってしまうが、やはりディスカッションに参加する意義はあり、各国の事情や制度の具体的な情報をグループに提供できていたことが有意義であった。

（３）成果と課題

本校に通うことで、学年や JSL メンバーに還元したものは大きい。ムスリムのお祈りの時間などの文化の違いや言語の違い、慣習の違いなどを知りながら友情関係を同年代で築けることは大きな収穫であった。何よりとても明るく礼儀正しく人柄も良かったので学年にプラスの影響をもたらした。学年では伝統舞踊を披露し、踊りのワークショップを開いた。マレーシアの IB 校との交流の際には、学校案内と受け入れ生徒との交流を行った。しかし、中間での交流会や年度末の成果報告会を開催できなかったことが課題である。他学年との交流や、学校全体に還元できる機会がより多いとよかった。年度末は新型コロナウイルスの影響で突然臨時休業になったため、踊りと挨拶を教員に向けて開くこと以外はできなかったことも課題である。

<資料>SGH 海外研修参加者選抜基本方針

選抜方針

- ・参加者選抜にあたっては、特定の生徒に研修の機会が偏らないよう配慮する。
- ・定員を超えた場合、全員書類および面接審査を行う。
- ・定員内の応募者であった場合、書類の内容で面接をしたほうがよいと判断された生徒、および留学から帰った生徒で課題研究に取り組み始めたばかりの生徒に関して面接を行う。場合によってはグループ面談で参加の意志や研究について話を聞き、参加者として適当かを確認する。
- ・審査の結果が同率であった場合は、成績や語学的能力、学習態度などを参考にする。
- ・ただし、選抜の過程で書類や面接の内容が参加者として適さないと判断された場合は、上記の配慮は適応されない。

選抜の評価規準と要素

<書類> 【15点満点】

①志望動機的确かさや研修への理解 【5点満点】

- 研修地域の特色等を理解し、この研修で行いたい活動（実現可能なもの）が明確である。
- 研修が遊びではなく、学修であることを理解しており、現地での不自由な生活にも耐えられる。
- 研修が集団行動であることや研修先でのコミュニケーションが必要であることを理解し、積極的に研修に貢献しようという意志がある。

②課題研究との結びつき（本研修を研究に生かせる可能性）【5点満点】

- 課題研究の内容とこの研修の関連性が明確である。それを説明できている。
- 研修によって課題研究の深化や発展が望める展望がある。

③研究の進捗状況と研究内容【5点満点】

- 現時点までに研究が進んでいることが分かる（計画性・遂行力など）。
- 研究の内容について明確に整理して説明できている、研修によって学び得たいことの有効性が説得力をもって示されている。

<面接> 【15点満点】

①志望動機的确かさや研修への理解 【5点満点】

- 研修地域の特色等を理解し、この研修で行いたい活動（実現可能なもの）が明確である。
- 研修が遊びではなく、学修であることを理解しており、現地での不自由な生活にも耐えられる。
- 研修が集団行動であることや研修先でのコミュニケーションが必要であることを理解し、積極的に研修に貢献しようという意志がある。

②課題研究との結びつき（本研修を研究に生かせる可能性）【5点満点】

- 課題研究の内容とこの研修の関連性が明確である。それを説明できている。
- 研修によって課題研究の深化や発展が望める展望がある。

③研究の進捗状況と研究内容【5点満点】

- 現時点までに研究が進んでいることが分かる（計画性・遂行力など）。
- 研究の内容について明確に整理して説明できている、研修によって学び得たいことの有効性が説得力をもって示されている。

*質問例

- ①この研修への参加を希望した動機
- ②研修の意義をどのように考えているか（事前・事後の学習や報告への取り組みを含む）
- ③自分の課題研究とこの研修との関わり
- ④この研修において自分はどのような貢献ができるか
- ⑤現時点での研究の進捗状況と研修後の展望（次年度以降の研究の継続）